

第11回「日本語大賞」

テーマ「美しい日本語」

一般の部 優秀賞 受賞作品

「言葉を紡ぐ、ということ」

新潟県

建内 真由子

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「ママ。半分このお月さま、笑ってるよ。」

夕方買い物帰りの道で娘に言われて見上げると、まだ明るい空に白い半月が浮かんでいた。弧を下にして捉えると、なるほどちょうど笑った口のような形に見える。

「本当だ、笑ってるみたいだね。よく気が付いたね。」

そう返すと娘は満足げにうなずいて、再び空を見上げた。立ち止まって一緒に眺めながら、私は娘のその言葉を、頭の中で反芻していた。

「半分このお月さま」だなんて、大人は決してしない言い方だ。「半分こ」は他人と何かを半分に分け合うときに使う幼児語で、それ以外の使い方はあまり聞いたことがない。だから「半分このお月さま」はきつと少し間違った言い方だ。それでも、娘の幼い視点から見た月を表すのに、それよりぴったりの言葉は無いように思えた。

加えて、月が笑うというのも、なんとも優しげで心が和む表現だ。私からは絶対に出てこないであろう言葉。なぜなら、私はすでに月が生命体ではなく地球の衛星だと知っている。衛星は、当然だが笑ったりしない。娘の中にはまだそういった先入観や固定観念というものがほとんどないからこそ、素直に見たままの姿を描写できるのだろう。

確かに間違いはあるし、稚拙で、完璧ではないかもしれない。それでも、幼い娘が一生懸命に考えてひねり出したその言葉は、こんなにも瑞々しくそして活き活きと胸に響いた。美しい言葉だ、と私は思った。

一二歳になったばかりの娘は、最近めつきりおしゃべりが盛んになってきたところだ。覚えてたの単語を使って、いつも一生懸命に何かを伝えようとしている。その時の彼女は真剣そのもので、見ているこちらまで少し緊張してしまうほどだ。一句一句をうなずきながら区切り、ゆつくりと言葉を繋いでいく。その慎重な姿は、まるで大切な宝物を扱うかのようだ。

「言葉を紡ぐ」という表現がある。言葉を選んで文章にするという意味だが、紡ぐというのは本来まったく別の場で用いられるそうだ。綿や繭から繊維を引き出し、撚りをかけて糸にする時に使う言葉なのだという。世の中に無数に散らばる単語の中から自分の表現したい内容に合致するいくつかを手繰り寄せ、撚り合わせて一つの文章にしていくということ。娘の話す姿を見ると、「言葉を紡ぐ」というその表現がいかにもしっくりくるように感じる。そして同時に、普段人々が何気なく行っているその行為がいかに難しく、また尊い作業かということに、改めて気付かされるのだ。

あまりにも当然なこととして軽んじてしまって、私は日々投げやりに、いい加減な言葉を使っていないだろうか。そしてその言葉は、果たして美しいだろうか。言葉と向き合う娘の真摯な姿勢は、そんな問いすら私に突きつけてくる。

娘が今感じているであろう、言葉を覚えたての頃の興奮、喜び。それはとうに私の手元からは遠く離れてしまった。それでも、彼女を見習って、これからはできるだけ丁寧に、大切なものとして、心を込めて言葉を紡いでいきたい。その姿勢が、自然と美しい言葉に繋がっていくことを切に願って。

「半分このお月さま、笑ってるよ。」いつも娘のことに何かと感動してはすぐに忘れてしまう私だ

が、この言葉だけは自戒の念も込めて、ずっと大事に覚えておこうと強く思った。そしていつかきつと彼女にも教えてあげよう。幼かったあなたは心を尽くして、こんなにも美しい言葉をこの世に紡ぎだしたんだよ、と。

そして今日もまた、真剣な面持ちで、娘が私に何かを言おうとしている。一句一句うなずきながら、ゆつくりと慎重に言葉を紡いでいく。それで私も一緒にうなずきつつ、次の言葉を気長に待つ。